令和３年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】 中高一貫教育の特長を生かし，将来を見据えた進路目標に向かって自発的に取り組むことのできる生徒を育成する。

	具体的取組	主担当	達成度判断基準	備考	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応
①	中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ，学級担任や学年主任等による積極的な面談を行う。	各学年	「ホーム担任や教科担任との面談によって，自分の学習姿勢や進路選択に良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　70%以上である Ｃ　60%以上である Ｄ　60%未満である	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。	生徒アンケート 「良い変化が生まれた」 (7月) 82% あてはまる 36% わりとあてはまる 46% (12月)83% あてはまる 35% わりとあてはまる 48% 【判定：Ａ】	肯定的評価の割合は7月の82%より微増し，昨年度12月の72%より大きく増加し83%だった。特に7月と比較すると2年生で肯定的評価の割合が増加している。文理選択や類型登録，進路検討の大切な時期に担任，教科担当等としっかり面談が出来たため，自分の学習姿勢や進路選択について安心して考えることができた結果だと思われる。また，年間を通じて，常に職員室等で生徒と教師が面談する様子が見られることから，生徒と教師の信頼関係が強くなり，面談の質が上がったものと考えられる。次年度も生徒が安心して相談や質問ができ，自分の進路について前向きに考えられるよう努めていきたい。
②	学校ＨＰや学年通信，各種便り等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに，ＰＴＡ活動や学校行事への参加拡大を図り，家庭との連携を強める。	総務課	「学校のＨＰや学年通信，行事案内など，学校からの情報を見ている」保護者の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　75%以上である Ｃ　70%以上である Ｄ　70%未満である	保護者アンケート（7月・12月）により評価する。	保護者アンケート 「学校からの情報を見ている」 (7月)　69% あてはまる 21% ややあてはまる 48% (12月) 71% あてはまる 27% ややあてはまる 44% 【判定：Ｃ】	12月の肯定的評価の割合は71%であった。今年度の7月のデータは69%であったので，前・後期とも昨年度の78%には届かなかったが，年間を通じて70%前後と安定した数値を維持できた。このことは年間を通じて安定して見てくれている保護者を獲得できていると捉える事もできる。 来年度に向けて，肯定的でない回答の30%の保護者もHPや学級通信を見てくれるような工夫を凝らし，肯定的な保護者の割合がアップするように努めていきたい。
			ＰＴＡ主催の行事に参加する保護者の数が，延べで Ａ　1，000人以上である Ｂ　800人以上である Ｃ　600人以上である Ｄ　600人未満である	各行事の参加者数を集計し，評価する。	PTA主催行事に参加した保護者の延べ人数は，2月1日現在，122人である。 【判定：Ｄ】	今年度のこれまでのPTA活動は，役員会，常任委員会，グッドマナーキャンペーン，学校祭の模擬店，保護者のための進学講座の撮影会などである。今年度も昨年度に引き続きPTA総会が中止となったため，例年の人数に遠く及ばないが昨年度の同時期と比較すると46人プラスとなっている。このことは，学校祭の模擬店に参加できたことや役員会の回数が増えたことが要因である。来年度に向けてコロナ禍が収束していなくても，学校行事に参加できる方法をPTA役員と協力して考えていきたい。
③	中高一貫教育校として６年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	教務課	「中高一貫教育校として，６年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に，教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価する。	職員アンケート（昨年同期） 「取り組んでいる」 69%（69%） あてはまる 12%（21%） ややあてはまる 57%（48%） 【判定：Ｂ】	肯定的評価の割合が，昨年（69%）と同程度であるが，昨年はこの割合が一昨年度（54%）から15ポイントと大幅に増加しており，今年度も比較的高い割合が継続されたといえる。今年度は，次年度に向けた新教育課程の指導や評価の在り方を，中学校の教員と情報を共有しながら深めるなどの活動を組織的に行った。今後も，高校数学の先取り学習など，中高一貫教育校のメリットを生かして，さらに創意工夫を進めていきたい。
			目標時間を達成している生徒の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　70%以上である Ｃ　60%以上である Ｄ　60%未満である	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。	生徒アンケート（昨年同期） ［平日の目標時間の達成割合］ 1年:61%，2年:35%，3年:72% (72%)　(63%)　(77%) ［休日の目標時間の達成割合］ 1年:43%，2年:49%，3年:32% (54%)　(76%)　(36%) 【判定：Ｄ】	学習効果は集中度によって左右されるが，ある程度の学習時間は必須であるため，この項目が設定されている。2年生の達成割合が昨年度よりも低迷している。この学年は平日に2時間以上学習している割合が67%となっているので，平日にあと30～45分程度学習時間を延ばす必要がある。昨年度より，生徒に課題を与えてただ勉強せよというのではなく，生徒に課題を選択させたり，その課題の意義を理解させる工夫をしている。今後も，生徒が自律的に学習を進められるようにしていきたい。 〈参考〉家庭学習の目標時間 平日　1年：2時間　2年：2時間30分　3年：3時間 休日　1年：4時間　2年：4時間　3年：8時間

④	いじめやネットトラブル等に関する校内研修や講習会を実施し，生徒のトラブルについて予防的対応を行うとともに，問題行動の早期発見を図る。	生徒指導課	いじめやネットトラブルの予防指導の必要性を理解し，「実践している」「ほぼ実践している」教員の割合が A　90%以上である B　80%以上である C　70%以上である D　70%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価する。	職員アンケート（昨年同期） 「実践している」 90%（96%） あてはまる 31%（33%） ややあてはまる 60%（63%） 【判定：A】	担任との面談や「いじめに関するアンケート」だけでなく授業の様子や部活動等，どんな些細なことでも連絡を取り合う環境を作り情報を共有するようにしている。 また，ネットトラブルの多い1年生を中心に「SNSの使い方教室」，「SOSの出し方教室」を行った。年間を通してネット環境を使った授業・講話等が多く，スマホの使用も場所を決めて認めていることからトラブルになることも想定される。今後も様々な機会をとらえて対応をしていく必要がある。
⑤	生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気を醸成し，気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	生徒会課	「学校生活において，挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A　80%以上である B　70%以上である C　60%以上である D　60%未満である 「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」生徒の割合が A　70%以上である B　50%以上である C　30%以上である D　30%未満である	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。	生徒アンケート（12月） 「積極的な挨拶」 １学年　75% ２学年　67% ３学年　63% 全体　69% 【判定：C】 「校外からの来校者に対する挨拶」 １学年　35% ２学年　33% ３学年　30% 全体　33% 【判定：C】	「積極的な挨拶」においても，「校外からの来校者に対する挨拶」においても7月よりもわずかではあるが上向きの傾向にある。生徒の意識が高まっている証であるように思う。新型コロナウイルス感染症の影響の下，「多くの生徒による挨拶運動」等の効果的な対策は講じずらい状況ではあるが，「生徒会執行部」を中心として生徒の意識をさらに高めるような対策について検討していきたい。
⑥	担任，学年団，生徒指導室，保健室，相談室，部顧問が十分に情報を共有し，課題や悩みを抱えた生徒を早期に発見し，自発的解決に向けて協力する。	保健・相談課	「関係教職員の情報共有により，問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A　90%以上である B　80%以上である C　70%以上である D　70%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価する。	職員アンケート（昨年同期） 「対応することができている」 94%（97%） よくできている　34%（41%） ほぼできている　60%（56%） 【判定：A】	肯定的評価の割合は，昨年よりは下がってしまったものの依然高い数値を保持している。本校では，生徒個々の状況を把握し，職員間で共有する姿勢が貫かれており，全職員が様々な機会を捉えて，問題を抱えた生徒の早期発見と支援に努めている。今後とも，保護者や外部機関との連携も含め，組織的な協力体制を向上させていきたい。
⑦	高校で求められる知識・教養・感性を身に付け，文章の理解力・表現力を育成するために読書を奨励する。特に，各教科と連携し，読書指導を授業やシラバスの他，あらゆる機会をとらえて行うことによって推進する。	図書課 各学年 各教科	「授業で図書を紹介するなど，生徒の読書量を増やすための指導をしている」と思う教員の割合が A　60%以上である B　50%以上である C　40%以上である D　40%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価する。	職員アンケート（12月） 「生徒の読書量を増やすための指導をしている」　47% とてもあてはまる　10% あてはまる　37% 【判定：C】	肯定的評価の割合は，昨年同期（56%）と比較して9%減少，7月のアンケート（46%）とほぼ同じ数値であった。特に，授業で図書を紹介する割合が，減少したと考えられる。一昨年同期（32%）よりは，15%増加となっているが，読書の重要性の高まりを考えると，今後も授業を通して適切な働きかけをするとともに，図書館からも読書の魅力をより積極的に発信する必要がある。

【重点目標2】 各教科・科目における指導を通して，深い思考力やコミュニケーション力などの向上を図るとともに，これからの社会の変化に柔軟に対応できる力の伸長に努める。					
	主担当	達　成　度　判　断　基　準	備　　考	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応
①ＩＣＴの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業研究に取り組み，生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに，論理的思考力や表現力の育成を図る。 また，各教科の特質を踏まえた言語活動を通して，「コミュニケーション力」の育成を図る。	各教科	「他の教員の授業を参観したり，自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が，錦丘中との交流を含め，年間４回以上あった」と思う教員の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価する。	職員アンケート（昨年同期） 「4回以上あった」32%（23%） 「3回」　26%（15%） 「1～2回」　40%（57%） 「0回」　2%（5%） 【判定：Ｄ】	昨年度は，新型コロナ感染症予防のため中高間の互見授業週間が前期・後期ともに中止されが，今年度は感染対策を十分に行った上で，互見授業週間を実施することができた。高校の教員が中学の授業を参観することで，「教育機器（ICT，黒板等）に関すること」の他に，「生徒への声掛け・気配り等に関すること」や「授業の目標やめあて等に関すること」等から，授業改善のヒントを得たとアンケート回答をしていた教員が散見された。今後も，相互に刺激を与えあって授業力向上につとめ，より良い６年間の教育を模索していきたい。
		「ＩＣＴを活用した授業により，学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　70%以上である Ｃ　60%以上である Ｄ　60%未満である	授業評価（7月・12月）により評価する。	生徒による授業評価 「学習効果が高まっている」73% よくあてはまる　40% ややあてはまる　33% 【判定：Ｂ】	昨年度までは，ICTの活用の回数も目標のひとつとしていたが，月に４回以上活用している教員が８割ほどに達したことから，今年度は活用内容の充実や教育効果に目標を一本化した。有志によるセミナーを含めて，今年度はICTに関する校内研修を活発に行うことができ，教員の指導技術は着実に向上している。次年度からはじまる「生徒一人一台パソコン」時代の授業に対し，今後とも組織的に取り組んでいきたい。
		「授業の中に思考を深める場面がある」と思う生徒の割合が Ａ　90%以上である Ｂ　80%以上である Ｃ　70%以上である Ｄ　70%未満である	授業評価（7月・12月）により評価する。	生徒による授業評価 「場面がある」81% よくあてはまる　47% ややあてはまる　34% 【判定：Ｂ】	肯定的評価は，昨年度（80%）とほぼ同様に高い水準を保っている。教科特性があり，この数値に教科によって多少のばらつきがあるものの，ほとんどの教科で75%以上となっている。特に，国語，英語といった語学系の教科が90%程度になっていることが顕著である。今年度は思考を深める場面においては，それがわかるように黒板に「思考力を鍛えよう」と書かれたシートを貼って，生徒に思考力を鍛える場面を意識させる工夫を組織的に行った。今後も，思考を揺さぶる発問や授業形態の工夫をしたりして，思考力の育成に努めていきたい。
		「この授業では，話し合い，発表，質問，実験・実習など，自分の言葉で考えたことや思いを伝える場面がある」と思う生徒の割合が Ａ　90%以上である Ｂ　80%以上である Ｃ　70%以上である Ｄ　70%未満である	授業評価（７月・１２月）により評価する。	生徒による授業評価 「場面がある」78% よくあてはまる　46% ややあてはまる　32% 【判定：Ｃ】	肯定的評価は昨年度より2ポイントの微増であった。教科別に見ると，国語91%，地歴公民74%，数学74%，理科78%，保健体育63%，英語88%と教科間で差があり，この傾向はあまり変わっていないが，例年は比較的やや低い教科の数学（昨年：68%），理科（71%），保健体育（56%）が上昇していることがよかった。学んだことをベースとして，自分の意見を発表させたり，生徒同士で教え合いをさせたりして，生徒の表現力の育成に努めていきたい。
②教科や総合的な探究の時間の内容を関連させ，表現トレーニング，プレゼンテーション，多文化共生理解などに取り組むことで，論理的・批判的に事象をとらえ，自らの考えを述べる力を育成する。	教務課	「さまざまな世界的・社会的事象に対して，より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。	生徒アンケート（昨年同期） 「関心を持つようになった」 69%（61%） あてはまる　18%（11%） ややあてはまる　51%（50%） 【判定：Ｂ】	各学年別に分析すると，「関心をもつようになった」の割合は，1年生で54%（昨年度：53%）であったのに対して，2年生で61%（66%），3年生で73%（65%）であった。授業を通してさまざまな世界的・社会的事象に対して，1年生よりも2・3年生の方が，より関心をもつようになっていることがわかる。さらに3年生は，昨年度からの増加が顕著である。 今後とも，課題探究を一層充実させるとともに，生徒が主体的に社会的事象を調べていく授業スタイルを盛り込んでいきたい。
③生徒自らが設定した進路目標の実現に向けて，学習意欲の向上を図るとともに，教員のサポート体制を強化する。	進路指導課	３年次４月の進路志望調査と卒業時の進路を比較し，その学問領域等が一致している割合が Ａ　65%以上である Ｂ　55%以上である Ｃ　45%以上である Ｄ　45%未満である	進路志望調査と進路結果により評価する。	3年次4月の進路志望調査と卒業時の進路先の学問領域等が一致していた人数は310名中，197名，64%であった。 【判定：Ｂ】	約2/3の生徒が3年の4月の希望と同じ学問領域の道に進んでいる。残りの1/3は4月当初とは別の分野へ進学する者，または，なりたい自分になるために，更にもう1年頑張り再チャレンジすることを決めた生徒である。様々な教育活動を通して，世の中にある様々な職業や学問分野についての理解を深め，将来の自分の姿をイメージすることができるように，3年間のキャリア教育をより一層充実させたい。
		今年度で学力を伸ばした１年生の生徒数が Ａ　180名以上である Ｂ　160名以上である Ｃ　140名以上である Ｄ　140名未満である 今年度で学力を伸ばした2年生の生徒数が Ａ　120名以上である Ｂ　100名以上である Ｃ　80名以上である Ｄ　80名未満である	進研模試（7月と１月，もしくは11月）により評価する。	今年度11月外部模試までで学力を伸ばした1年生の生徒数は，194名であった。 【判定：Ａ】 今年度11月外部模試までで学力を伸ばした2年生の生徒数は，150名であった。 【判定：Ａ】	3教科総合偏差値結果で，7月外部模試と比較して11月外部模試で成績がが伸びた生徒の人数は，1年生で194名，2年生で150名であった。 予習・復習を伴った日々の授業の積み重ね，および夏期補習や課題への効果的な取り組み。さらに自主的な学習計画の作成などの取り組みの成果であると捉えている。今後とも生徒の実情を把握しつつ，適切な学習指導を行っていきたい。

【重点目標3】 多忙化改善に向けた教職員の意識改革を図るとともに，業務の平準化や部活動指導の効率化など，校内における勤務状況の改善を推し進める。						
	具　体　的　取　組	主担当	達　成　度　判　断　基　準	備　　考	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応
①	多忙化の大きな要因となっている部活動において，限られた時間の中で活動を行う。	生徒会課	1，２年生で「勉学と部活動の両立ができている」と思う生徒の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。	生徒アンケート　（12月） 「両立ができている」 １学年　56% ２学年　54% 全体　　55% 【判定：Ｃ】	1学年においては，7月よりも大幅に「勉学と部活動の両立ができている」生徒の割合が減っている。一方，2学年においては，7月よりも大幅に「両立のできている」生徒の割合が増えているといった状況である。全体としては，ほぼ7月と同じような割合となっている。今後も生徒と担任・顧問の先生方との面談を通した生徒への支援を呼びかけていきたい。
②	時間外勤務や会議時間の短縮，効率化に学校が一丸となって取り組み，多忙化改善に向けた教職員の意識改革を行う。	総務課 管理職	「業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を高めた」と考える教員の割合が Ａ　95%以上である Ｂ　90%以上である Ｃ　85%以上である Ｄ　85%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価する。	職員アンケート（12月） 「タイムマネジメントの意識を高めた」　71% とてもあてはまる　29% あてはまる　42% 【判定：Ｄ】	1ヶ月あたり2日の定時退校日に加え，職員会議を勤務時間内に収める取組などの対策等で，業務の効率化を促し，ライフワークバランスへの意識向上にも努めてきた。その結果，時間外勤務は例年に比べてやや少ない状況に推移しているものの，まだまだ勤務時間終了後も残留している職員が見受けられるのも確かである。アンケート結果では，タイムマネジメントの意識において，まだまだ改善の余地があることがうかがえる。今後は精選が可能な業務を特定するとともに，職員自身がよりタイムマネジメントを意識するような働きかけを進めていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	・授業を見学してICTが活発に活用されていることがうかがえた。ICTの活用に関しては、無理やり活用するのではなく、必要に応じて使えるところは使うというスタンスで良いのではないか。 ・職業人インタビューで生徒とZoomで対話をすることがあったが、音声がとぎれとぎれになった。先生方のICTスキルがもう少し上がると良いと思った。 ・コロナ欠席や休校時によるリモート授業の対応が整ってきたので、不登校の生徒に対してもリモート授業を活用していけばよいのではないか。 ・コロナ禍の中、学校運営に大変苦心されていることが分かる。その中で「生徒による授業評価」において、ほぼすべての項目で肯定的な意見が増加していることは、高く評価される。この結果は、間違いなく先生方の努力に起因するものであり、学校のPDCAサイクルが正しく機能している証だと考える。 ・学校に満足している生徒も保護者も多く、とても良いのではないか。 ・コロナ禍で制約が多い中、授業がわかりやすい、興味関心が高まった、教員の熱意・工夫が感じられるといった項目において非常に肯定的で、とても良い。 ・生徒に自分の夢を描かせることに関してうまくいっているのではないか。生徒へのアンケートにおいて、社会への関心、人間性の向上、行事で育む自主性等において肯定的な数値になっていることにも裏付けされている。その次の課題として、夢を実現させるための計画を立てさせ、それを実行に結びつけていかなければならない。 ・家庭での勉強時間は、目標値に届いていないが、時間の数値はあまり気にしなくても良いのではないか。学習もタイムマネジメントや効率化が必要になってくると考える。 ・授業を見学して、授業が丁寧で、特に授業の準備が素晴らしいと感じた。しかしその反面、先生の長時間勤務の問題が気になる。先生の負担軽減に学校として取り組んでほしい。 ・先生方が熱意をもってやっていることがわかるので、かえって、先生方の時間外労働に関して心配をしている。 ・民間企業では紙ベースの資料をなくしたり、ノルマをなくしたりして、変わってきている。学校現場もデジタル化をどんどん推進していくべきである。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方法	・授業の様子を、ICTを活用して配信する方法は、不登校の生徒だけでなく、コロナ禍で急な自宅待機等になった生徒の学びの保証にも活用できると考える。しかしながら、教室にいる生徒および先生の肖像権の問題や学校の授業を動画配信することに対する文科省や県教委の方針が定まっていないこと等、難しい問題をいくつか含んでいる。これらの問題を乗り越えながら、前に進めて行けるよう検討をしていきたい。 ・今年度、GIGA校内研修担当リーダーなどを中心に、校内研修会等を通して教員のICTスキル向上を図るとともに、組織的にICTの活用を推進してきた。今後も継続して取り組んでいきたい。 ・リモート授業に関しては、ハード、ソフトの両面で難しい課題をいくつか含んでいるが、これらの課題を乗り越えながら、前に進めて行けるように検討をしていきたい。 ・総合的な探究の時間を中心とし、あらゆる教育場面でキャリアを意識させる仕掛けを行っている。今後は、総合的な探究の時間の内容に関してPDCAサイクルを回して改善を行い、生徒の夢の計画を実行にむすびつけていけるようにしていきたい。 ・職員会議におけるペーパーレスをすでに行っているが、タブレットはメモを取りにくい等の理由でペーパーがほしくなるのも事実である。世の中の変化に学校も対応できるようにしていきたい。 ・業務改善に関しては、世の中が変化しており、学校はその感覚についていかなければならない。若い先生にとっても働きやすい職場にしていくことが大切であると考えている。 ・高校では、昨年度から平日補習や土曜補習は撤廃し、3年生の校内模試も全てなくした。その結果、勤務時間外に先生が教材研究をしなくてもよくなり、時間外勤務の時間が20%程減少した。